

# 経皮内視鏡的胃瘻造設術術後、 経管栄養を離脱し得た症例に対しての検討

愛知県厚生連海南病院 内科 ○蟹江治郎、河野勤、大澤雅子

早蕨会 福祉村病院 内科 赤津裕康、山本孝之

国立長寿医療研究センター疫学研究部 下方浩史

名古屋大学老年科学教室 井口昭久

# 目的

経皮内視鏡的胃瘻造設術の  
施行後、経口摂取が可能と  
なり経管栄養から離脱がで  
きた症例についての検討

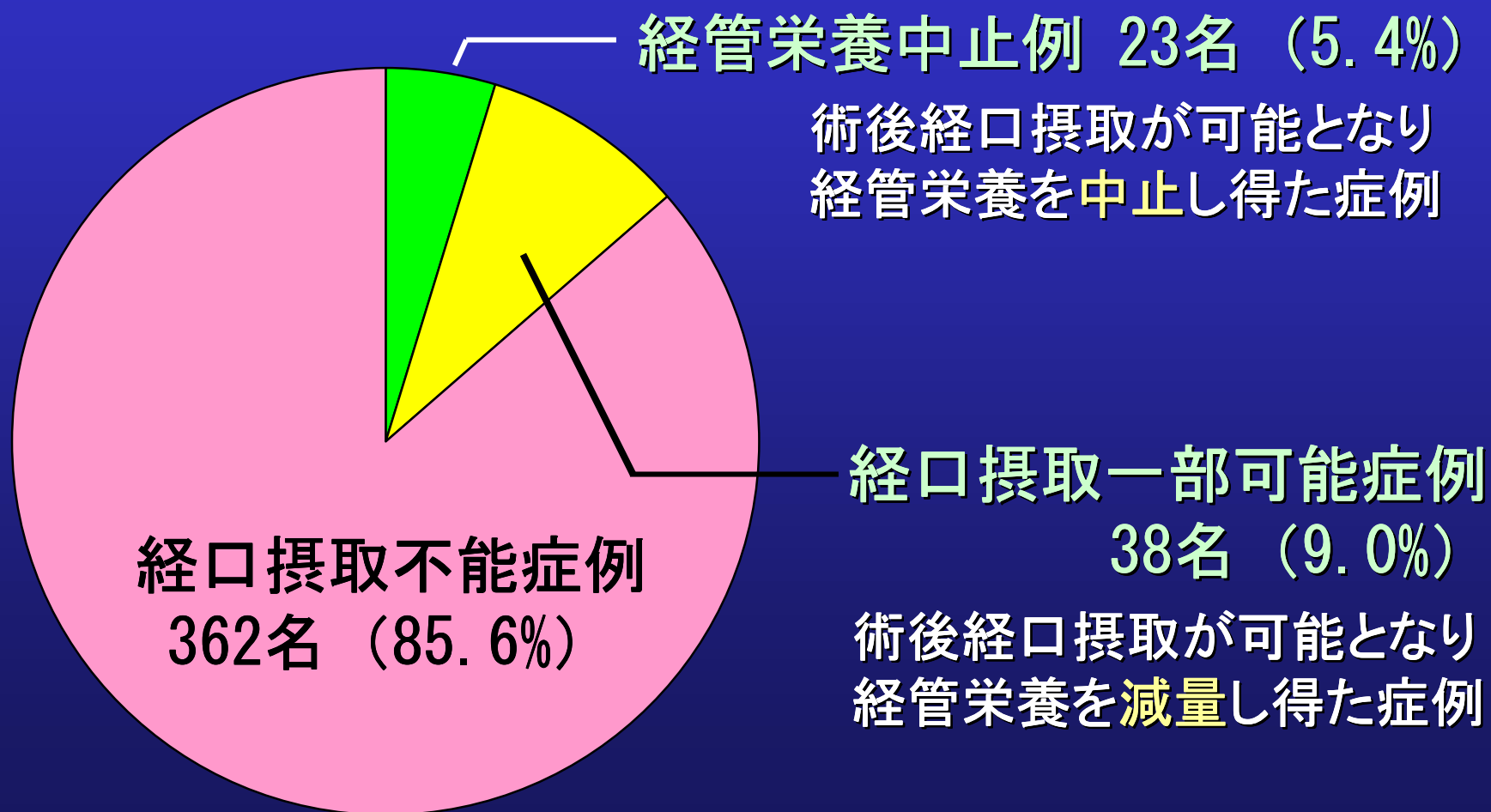
## 対象

経皮内視鏡的胃瘻造設術施行症例中  
術後に経口摂取が可能になった事により  
経管栄養が中止となった症例

## 症例数

423名(男168名 女255名 平均年齢77.4才)  
内 経腸栄養中止症例 23名(男4名:女19名)

# 経口摂取可能症例の内訳



# 経管栄養中止可能症例

名前	年齢	性	基礎疾患	術前栄養投与法	合併症
I.K.	78	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管栄養	無し
F.M.	80	女性	痴呆	経鼻胃管栄養	無し
I.N.	63	男性	脊髄損傷	中心静脈栄養	無し
H.T.	87	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管栄養	無し
S.Y.	63	女性	脳挫傷後遺症	経鼻胃管栄養	無し
O.U.	89	女性	痴呆	経鼻胃管栄養	無し
M.K.	83	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管栄養	無し
H.A.	85	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管栄養	無し
S.K.	58	男性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管栄養	無し
S.S.	46	女性	髄膜炎後遺症	経鼻胃管栄養	無し
M.A.	61	女性	痴呆	経鼻胃管栄養	カテーテル誤挿入
A.M.	85	女性	痴呆	経口摂取	無し
S.N.	82	女性	脳梗塞後遺症	経口摂取	無し
Y.H.	81	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管栄養	無し
M.G.	92	女性	痴呆	経鼻胃管栄養	無し
N.S.	62	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管栄養	短期発熱、チューブ再挿入不能
O.T.	71	男性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管栄養	肺炎、胃潰瘍、チューブ誤挿入
K.S.	87	女性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管栄養	無し
F.T.	76	女性	脳梗塞後遺症	中心静脈栄養	無し
H.H.	85	女性	痴呆	経口摂取	皮下膿瘍
M.T.	85	男性	脳梗塞後遺症	経鼻胃管栄養	皮下膿瘍
A.T.	81	女性	脳梗塞後遺症	中心静脈栄養	無し
M.M.	82	女性	脳梗塞後遺症	中心静脈栄養	無し

# 経管栄養離脱例と非離脱例の差 ①

## —基礎疾患の差—

	経腸栄養離脱例		経腸栄養非離脱例
脳梗塞後遺症	15名 (65.2%)		165名 (41.3%)
痴呆	6名 (26.1%)	**	126名 (31.5%)
その他	2名 (8.7%)	n. s.	109名 (27.3%)
計	23名	n. s.	400名

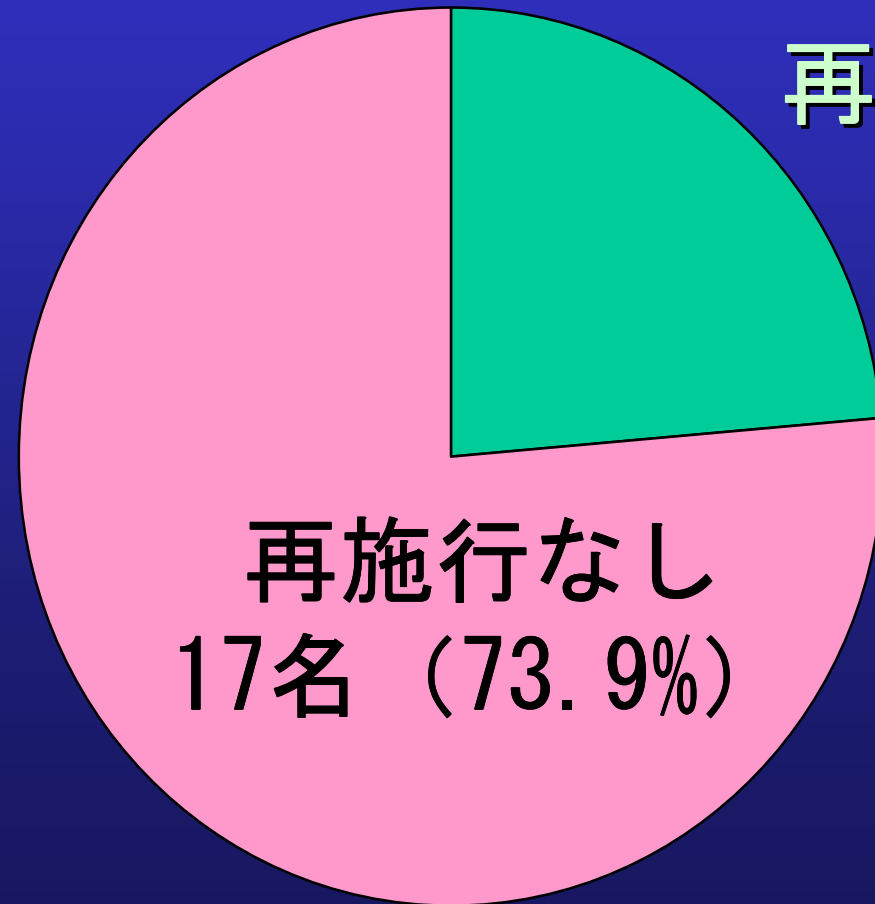
\*\* ; p=0.024

# 経管栄養離脱例と非離脱例の差 ②

## —術前経腸栄養投与法の差—

	経腸栄養離脱例		経腸栄養非離脱例
経鼻胃管栄養	16名 (69.6%)		250名 (62.5%)
中心静脈栄養	4名 (17.4%)	n. s.	103名 (25.8%)
経口摂取	3名 (13.0%)	n. s.	47名 (11.7%)
		n. s.	
計	23名		400名

# 再胃瘻造設症例



再施行あり

6名 (26.1%)

経口摂取が可能になった後、状態の変化により経管栄養が必要になり、再胃瘻造設となった症例

原疾患；脳梗塞後遺症 4名

痴 呆 2名



# 結果

- 423名の高齢者に対して経皮内視鏡的胃瘻造設術を行い、うち61名(14.4%)が経口摂取が可能になった。
- 経口摂取が可能になった症例のうち、23名(5.4%)が胃瘻栄養からの離脱が可能になった。
- 基礎疾患では、経管栄養からの離脱群が非離脱群に比して脳梗塞後遺症が高頻度であった。
- 経腸栄養離脱群と経腸栄養非離脱群の、術前栄養投与方法の割合には有意差はなかった。
- 経腸栄養離脱群のうち6名(26.1%)は、その後の状態の変化により再度PEG栄養が必要になった。

## まとめ ①

- PEGの適応となる症例の一部は、経口摂取が可能になることにより、経管栄養からの離脱が可能になる。
- 経管栄養からの離脱は、脳梗塞後遺症を基礎疾患に持つ症例で、その可能性が高くなる。
- 経管栄養からの離脱は、経鼻胃管からの移行症例のみならず、他の経腸栄養投与方法からの移行症例でも同様の効果がある。

## まとめ ②

経管栄養からの離脱例のうち、一部の症例では状態の変化により再度胃瘻栄養が必要となる場合がある。

そのため胃瘻の閉鎖においては適応を慎重に選択し、再度適応となる可能性のある症例は、ボタン型胃瘻チューブなどにより、一定の期間は瘻孔の確保を行うことが望ましい。